

【熱中症対策】

～予防のポイント～
高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業するとともに、できるだけ単独作業は避けましょう。また、喉の渇きを感じる前にこまめに水分・塩分補給し、熱中症対策アイテムを活用しましょう。
～熱中症が疑われる場合～
涼しい環境へ避難し、水分・塩分を補給してください。応急処置をしても症状が改善しない場合は医療機関で診療を受けましょう。

【天気予報及び概況】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は高い見込みです。

	平均気温（℃）	最高気温（℃）	最低気温（℃）	降水量（mm）
2025 年	28.7	33.7	24.9	118.5
2024 年	28.9	34.1	25.0	217.0
2023 年	28.0	33.5	24.6	204.0
1991～2020 年	27.9	32.2	24.4	162.6

※気温については8月の平均値
（気象庁）

【作 物】

1 穂肥施用時期（目安）

品 種	施用時期	肥料名・施用量
ヒノヒカリ	出穂 20 日前 （田植え 6/15、穂肥 8/1 頃）	化成 444 又は NK 特 11 号 30 k g/10a

2 水管理について

- 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期（出穂 25 日前）～穂ばらみ期：土壤水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期～出穂期以降：浅水管理（2～3 c m）をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期：灌水して土壤に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度（飽水状態）にします。
- 落水期：落水期は収穫前 7 日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壤水分を保ちます。

3 病害虫防除について

防除時期	病害虫名	農薬名 散布濃度・使用量 使用時期
8月中旬 ～8月下旬 （出穂期前）	カメムシ類・ツマグロヨコバイ・コブノメイガ・ニカメイチュウ・イネツトムシ・ウンカ類・紋枯病・もみ枯細菌病・いもち病	スタークル顆粒水溶剤 (2,000 倍 収穫 7 日前まで) ＋ パダン SG 水溶剤 (1,500 倍 収穫 21 日前まで) ＋ ダブルカットバリダ FL (1,000 倍 穂揃期まで) (粉剤の場合：ワイドナーエス粉剤 DL 3～4 kg/10 a、収穫 14 日前まで)
8月下旬～ (穂揃期 ～傾穂期)	カメムシ類 (ウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤 (2,000 倍 収穫 7 日前まで)

- ・稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性があります。出穂 20～15 日前にドイツボルドー A2,000 倍（出穂 10 日前まで）を予防散布してください。他剤との混用はできません。
- ・カメムシ対策として、ほ場周辺の草刈りを行ってください。出穂 3 週間前と出穂時の 2 回実施すると効果的です。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂 10～15 日後に防除を実施してください。 <松本>

【野 菜】

1 果菜類

(1) 灌水

梅雨明け後は、適宜畝間に灌水を行います。灌水は朝夕の涼しい時間帯に行い、日中は畝間に水が溜まらないように注意してください。水が溜まっていると、溝まで伸びた根が傷み、生育が悪くなることがあります。

(2) 追肥

生育(収穫)期間を長く保つためには収穫量に応じた追肥が必要です。常に勢いのある芽を確保するために、7～10 日間隔で、窒素成分で 2～3 kg/10a を目安に施用します。乾燥している土壤の場合は、施用後灌水してください。

(3) 摘葉

果菜類は、生育後半を迎え、葉が込み合ってくる時期です。きゅうりでは、込み合った葉を除去し、果実や子枝・孫枝に光を当ててください。1 回の摘葉は 2 枚程度としてください。

2 こんにゃく

病害虫防除

こんにゃくは、病気に弱いため早期発見・早期防除をするよう心がけてください。高温期には多湿条件で葉枯病・腐敗病の発生が助長されますので、多灌水は控え、排水対策も十分行ってください。降雨の後や病気にかかった葉を取り除いた後に、I C ボルドー 66D (40 倍) 等を散布してください。
なお、薬剤散布は朝夕の涼しい時間帯に行ってください。 <横山>

【果】

1 除草管理

栗は、夏期に乾燥すると果実の肥大が悪くなります。草刈りや敷き草等により乾燥を防ぎましょう。

2 収穫

高温期の収穫は遅れると乾燥によるしなび果や炭そ病被害果の発生が多くなります。果実品質の低下を防ぐために毎日、朝・夕に収穫するようにしましょう。
また、収穫の省力化を図るため収穫ネットの導入も考えてください。

3 病害虫防除

収穫時のモモノゴマダラノメイガの発生は、果実の商品性を著しく低下させます。
早生種は 8 月上～中旬から、中晩生種は 8 月下～9 月上旬から防除を行います。薬剤はパダン S G 水溶剤 1,500 倍を散布してください。 <三谷>

【シキミ】

1 病害虫防除

高温期に多発する病害虫の適期防除を徹底し、お彼岸出荷に備えます。防除は高温時を避けて涼しい時間帯に実施し、薬剤が葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。

対象病害虫名	農薬名	散布濃度	使用時期/使用回数
クスアナアキノウムシ	コテツフロアブル	2,000 倍	発生初期/ 2 回以内
グンバイムシ類	モスビラン顆粒水溶剤	2,000 倍	発生初期/ 5 回以内
サビダニ類	ピラニカ EW	1,000 倍	発生初期/ 2 回以内
ケムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2,000 倍	発生初期/ 5 回以内
うどんこ病、炭疽病、輪紋葉枯病	トップジン M 水和剤	1,000 倍	発病初期/ 5 回以内

2 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり、防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くしてください。

3 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除き、出荷先の規格に合わせて、輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で 10 時間以上、水揚げをしてください。 <浜田>

【茶】

1 土壌改良

茶園土壌の適正 pH は 4～5 です。強酸性になっている茶園では、肥料成分が吸収しにくい状態になっています。このため、8 月中旬頃に石灰資材を 120～150 kg/10a 施用して深耕し、pH を矯正します。
なお、鉍物質である苦土石灰等を多用すると土壤が硬くなる可能性がありますので、動物系のカキ殻石灰などを利用すれば、秋肥と同時に施用できます。

2 深耕

茶園のうね間は摘採や管理のため踏み固められ、土壤物理性が悪くなっています。深耕を行い、通気性の改善と吸収根の再生を促します。
作業は通常、新根の発生が旺盛になる前（8 月中下旬）、石灰資材施用後に行います。時期が遅れると切断した根が回復せず、かえって地上部の生育が抑制されますので注意してください。

3 秋肥

茶樹にとって秋肥は、翌年の一番茶の品質を左右する重要な肥料です。石灰資材施用 2 週間後（8 月下旬）に第 1 回目の秋肥を施用します。施用量は、窒素成分で 14 kg/10a（えひめ茶有機 100 では 10 袋、えひめ茶有機グリーン 1 号では 7 袋）を施用し、土と混和してください。 <松本>